

たはやすく雲のあつまる秋ぞらをみなみに渡る群鳥のこゑ

昭和19年11月5日

出典「幸木」

渡り鳥 五七才

(鹿沼市花木センター歌碑・昭和53年建立)

- \* みんなみの空にむかひて吾子の名を幾たび喚ばば心足りなむ  
昭和19年9月9日 同右
- \* 胸騒ぎしきりにしたる彼の日より生ける心地は吾になかりき  
昭和19年9月20日 同右
- \* サイパンはいかにかあらむ子が上を昨日も憂ひ今日も憂ふる  
昭和19年9月20日 同右
- \* 人はよしいかにいふとも世の中は吾には空し子らに遅れて  
同右
- \* この世にしわが生ける間にサイパンに日のみ旗をばまた掲げてむ  
同右
- \* 若きらが親に先立ち去ぬる世を幾世し積まば国は栄えむ  
昭和19年9月25日 同右
- \* 大君(すめぐに)にいのち捧げし子が上を親にまさりて誰か思へる  
同右
- \* 年ごとに子を失ひて三人目はわが大君に捧げまつりぬ  
昭和19年10月6日 同右
- \* かえりくるものならなくに或る時は心うつけてわが子を待てり  
同右
- \* いっ行きて子を弔はむ東京より三三〇〇キロの洋中の島  
同右
- \* サイパンを爆撃したり世の常の爆撃行と吾は思はず  
昭和19年11月11日 同右
- (サイパンに生き残りの勇士ありという外電あり。もしや信三は?)
- \* 人ならば吾をさいなむ「運命」にをどりかかりて咽喉しめましを  
昭和19年11月23日 同右
- \* サイパンに生き残りと思はねど今宵はしじに吾が子偲ばゆ  
昭和19年12月1日 同右

### 構成歌 (守城)

みんなみの空にむかいて信三の名を喚び渡れ秋の群鳥

サイパンの空にむかいて吾子の名を喚び渡れ南無秋の群鳥

ただ一首の歌にその名をとどめたるわが下野の今奉部与曾布 昭和18年

出典 「幸木」 西空 五六才

(鹿沼市立津田小学校 歌碑・昭和25年4月建立)

- \* 今日よりは顧みなくて大君の醜しみの御楯みたてと出で立つ吾は 万葉集 卷二〇
- \* 男子やも空しかるべし万代ちひひ代に語り続くべき名は立てずして 万葉集 山上憶良

\* 「歌は私にとつては、自己の心の内に刻々に生起しやがて消えてゆく感動を表現したものである。私はその感動を凝視し表現することによって、現在よりもより高き位置に自己の生を占めて行くことができる。いわば歌は、現在の生より将来の坐に自己を進める一つの階段である。この意味において歌は現在の自己の解脱であり解放であると言ってもよいかもしれぬ。こう考えてくれば、私は昨の歌を否定することに勇氣を生じ、そして今の歌よりもよきものたらしめようという努力も自ら湧いてくるのである。」

(大正6年9月短歌雑誌・良平)

\*「自らを最もよく生かしてくれたものは、この言葉の道であった。」良平・創元文庫

### 構成歌（守城）

永遠の今いのち燃やさんひたすらにこの名その歌言の葉の道  
とわの時のちとどめんだだ一つこの名その歌言の葉の道

ふる里の家の門みち長ければゆきかえり見つ日の暮れかたを 大正6年

出典「野づかさ」帰郷感慨 三〇才

（良平の生家歌碑・鹿沼市深津 半田孝雄家 昭和61年建立）

- \* をさな子が吾にいひかくる片言もききのがしがたし家離りくれば
- \* 立ちとまり我を見あぐる幼な子をすかし歩ます路は長しも
- \* 子を抱きてゐろりべに寄る夜のくだち言葉すくなくなりにけるかも
- \* ははその母はめずらしこの夜ごろ孫をいできてとく寝ぬるかも
- \* ふる里のさ夜の小床にひとり寝る心はやせていかにかはせむ
- \* たまさかに古里にかへり父母とおなじ家になつ寒き夜ごろを

この原ゆただにそばたつ男体の山をかしこみ草に坐てあおぐ 大正7年8月9日

出典「野づかさ」日光山中雑歌 戦場ヶ原 三二才

（鹿沼市松原近隣公園歌碑・平成2年建立）

- \* 男体の山を高みか天わたる雲はなづさふその山原に 野づかさ 戦場ヶ原
- \* 雲の行き著くしあれや男体の山のかげりのややに動く見ゆ 野づかさ 戦場ヶ原
- \* 東京の高きところに登たち見ゆる山々を数えて飽かず 旦暮
- \* 東京より見ゆる山山百余座と数うる中に故郷の山もあり 旦暮
- \* 朝しばし晴るる日光連山を子らに見せしむ家の裏に出て 旦暮

### 構成歌（守城）

路長し吾を見あげる幼子とかしこみ男体を仰ぐ吾共  
家路遠しわれを見上げる幼子とかしこみ山を仰ぐ吾もと

### 墓碑

良平の墓は、生家の西方、約300メートル離れた田畑の中の墓地にある。  
良平は昭和二〇年五月十九日永眠。この墓地には長男宏一、次男克二、三男  
信三と美好夫人が眠っている。

「半田良平之墓」 昭和三十二年五月十九日十三回忌 半田美好門下建之

出典「幸木」歳晚帰郷五首 昭和19年

- \* 西空に紅を流せる雲褪せてふる里の道はまだなかばなり
- \* この道をふたたび吾の通る日のありや否や病みておもひき
- \* おとうとは供出米に関わりてめでたく事を果たししといふ
- \* 晴れし日は朝より照りてあたたかきこの墓原に子らは臥せる
- \* この土の下に眠れるわが子らと墓並べむは幾とせの後